χ 二乗検定をはじめ種々の推計的手法がとられている．（金井弘夫）

□土橋　豊：**観葉植物 1000** 279 pp. 1992. 八坂書房．¥5,800（＋送料）．

園芸界では国際的な流通拡大と品種改良技術の進歩が著しい．数年前に出版された名鑑や図録などでは見いだせぬ商品がごく普通に市場に見られることもざらである．

本書は現在市場に出回っている1，000種類（種ではない）の観葉植物をカラー写真で紹介し，特徴，栽培法などを簡素に述べたものである．著者は京都府立植物園に勤務する．

この類の著書では，まずどの程度世界各地の植物を正しく同定しているかが，われわれの関心を引く．この点では，画期的な小学館版「園芸植物大事典」があるとはいえ，正しい学名や園芸品種名を決めることは並み大抵のことではない．本書は索引とともに，同定に相当な努力を払ったと思われる．私の気づく範囲では明かな誤りは見出せなかった．

103のカラー図版は眺めるだけでも楽しい．解説は手ごろな入門書でもある．（大場秀章）

□川崎哲也（解説），奥田　寛，木原　浩（写真）：日本の桜 383pp. 1993. 山と渓谷社 ¥4,900.

山渓セレクションのひとつとして出版された，日本のサクラの写真による図鑑といってよい．各地の栽植品のほか，野生品についてたくさんの写真が収載され，眺めているだけでも愉しい．

しかし，何といっても出色なのは川崎哲也氏による解説である．植物画家としても定評のある川崎氏の解説は種のみならず栽培品種の特徴をもよく捉えている．各種，栽培品種には和名と学名が表記され，巻末の「サクラ系統別一覧」にそれらがまとめられている．本書で用いた42の新学名一覧も載せる．

日本のサクラは野生種とも栽培品種とも高い変異性を示している．これらを保全することは，種の保全上大切なことである．本書では数多くの雑種が推定されているが，その機構には立ち入って検討されていない．

これは蛇足だが，野生種についての雑種という表現は，そろそろさらに深く立入って検討されるべきである．

イシヅチザクラ，ヤブザクラの学名に，雑種を示す記号，×が附されている．ここでは理由は省くが，私はこれらの‘雑種由来’のサクラには×は不要と考える．

これまで山と渓谷社の出版物には学術的側面に難がみられたが，本書は実にすばらしい．

（大場秀章）

□中池敏之・Malik S.（編）：**Cryptogamic Flora of Pakistan Vol. 1.** 316 pp. 1992. 国立科学博物館（東京）・パキスタン自然史博物館（イスラマバード）．

パキスタンはインドの西側にある国で，南のアラビア海の0mから，北の8600mを越す雪の山まで，地形も気候も変化に富んでいるので，植物の種類も多いと言われている．1990年の8月上旬から9月下旬にかけて，文部省の国際学術研究費による日本・パキスタン合同の隠花植物の調査研究が実施された．日本側は中池隊長以下8名，パキスタン側はSheikh, B. A. 議長およびマリク指導者以下10名の隊員から成る大部隊が，パキスタン各地で採集・同定を行なった．採集した標本は日本の国立科学博物館とパキスタンの自然史博物館に保存されている．この報告書には24氏の研究になる17編の論文が載っている．内訳は藻類4編：海産藻類目録，ラン藻類，マングローブ林内の大型藻類．菌類10編：粘菌類，サルノコシカケ類，担子菌類，腹菌類，サビ菌類．蘚苔類2編：ハイゴケ類の染色体数，セン類目録．シダ植物1編：目録（これには68種類の脂葉写真が付いている）．（伊藤　洋）

□中池敏之：**新日本植物誌　シダ篇　改訂増補版** B5判　868 pp.　1992年11月，至文堂，東京．¥25,000（税込）．

初版は1982年に出たので，10年ぶりの新版ということになる（旧版は本誌 **57**：211 に紹介した）．この間シダ学の進展は著しく，著者も含めた内外研究者の論文が次々と登場した．今回の新

版では元のページはそのままに残し，改訂増補分56ページを巻末に追加している（索引には追加分も組込まれた）．追加された内容は，学名の変更，種類の追加，異名・雑種などに関する意見，記載の補充，分布の追加など，合計500余件に上っている．その中の新名（新組合わせおよび新位置）60個は別に取出して有効に記載されている．更に新図（基準標本の写真など60点）15ページと，科・属一覧表4ページが含まれている．このように本書はますます内容が充実してきた．シダの分類には欠かせない文献の一つである．

（伊藤　洋）

□Miller N. G. (ed.)：**Advances in Bryology Vol. 4.** Bryophyte Systematics. vii＋264 pp. 1991. J. Cramer, Berlin.

コケの分野でも，種子植物の後を追って，新しい手法が導入され，その手法による分類や系統に関する論文が続々と出ている．本書はコケの分類学関係の8編の総説が収録され，新しい手法による最近の成果が紹介されている．

その8編のタイトルは，コケの分類学と個体群生物学への酵素電気泳動法の適用；生態遺伝学，進化拘束とコケの分類学；ゼニゴケ類の二次化学（二次代謝産物）；実験室および温室での培養とコケの実験分類学；蘚類の系統解析における個体発生のデータの利用；腋果性蘚類の科の分類の基礎；コケの研究，特に分類学におけるデータの電子処理；“緑藻”と“コケ植物”との間の系統的なつながり，である．DNA塩基配列の解析による分子系統学的研究は最近の分類学におけるトピックスの一つであり，コケでもすでにいくつかの論文が出ているが，本書にその関係の研究のレヴューは載っていない．どうやら，新しい方法論の普及はコケの分野では種子植物に比べてかなり遅れているようである．

本書の「エピローグ」で，長年，記載分類に携わってきた蘚類分類学の大家のH. クラムは，最近，分類学に導入されたこれらの手法を評価し，コケの分類学でも新しい研究を大いに推進すべきであると述べている．しかし，同時に，その研究は植物をよく知っている分類学者によって行われるべきであると釘をさしている．

「コケの分類学と個体群生物学への酵素電気泳動法の適用」の総説では，コケの種はしばしば遺伝的に多型であり，表現型ではほとんど区別ができない個体群の間にも，遺伝的には大きな分化が起こっているケースが多いことを示している．例えば，ジャゴケは北半球の温帯地域に広く分布し，通常，ユニフォームな種と見なされているが，電気泳動法によるアイソザイム解析によれば，遺伝的に大きく分化した同胞種（隠蔽種）からなることが分かった．それらの同胞種は地理的にまとまっており，ヨーロッパに1種，北米に1種，ヨーロッパと北米に分布する1種，日本に1種の，計4種からなり，それらの間の遺伝的距離は，ある場合には，維管束植物の属間に普通に見られる程度の大きさであるという．その他，倍数性の由来（同質倍数性か異質倍数性か），雌雄同株のコケにおける同一個体間での受精の頻度，繁殖システムの解析など，従来の研究手段では解明しがたい問題のヴェールが次々と剝がされている．

「“緑藻”と“コケ植物”との間の系統的なつながり」の総説は，緑藻植物と陸上植物との系統関係を分岐分類学の手法で論じたものであり，陸上植物が単系統群であり，コレオケーテないしシャジクモに近い緑藻から由来したと結論づけている．この総説は，緑藻とコケとの系統関係というよりも，むしろ緑藻内の分類群間の系統を中心に扱っている．そして，コケもシダも種子植物もつっこみで，有胚植物（陸上植物）として一括されており，コケの研究者が知りたい，コケとシダとの系統関係や，コケの高次の分類群間の系統関係に触れていないことが不満である．それらの分岐分類学研究はすでにいくつか発表されているので，本書のタイトルに忠実であるためにも，まず，コケを中心とした研究を紹介すべきであった．

（北川尚史）

□Yamagishi T.: **Plankton Algae in Taiwan (Formosa)**（山岸高旺：台湾産浮遊性藻類）252 pp. 1992. Uchida Rokakuho, Tokyo（内田老鶴圃，東京）¥12,360.

台湾のフローラは，高等植物や海藻については，